

お オキシトシン良い陣痛で母子守る
 《陣痛促進剤》

オキシトシンは「愛情ホルモン」とも言われ、他者への愛情や信頼感をもたらすと言われていています。赤ちゃんがおっぱいを吸うと母乳が出るのもオキシトシンの作用ですが、同時に赤ちゃんを愛おしく思う気持ちにさせてくれます。また「癒しのホルモン」でもあり、脳の疲れ、心の疲れを取るとされています。サプリメントとしてオキシトシンのスプレーもあります。サプリの効果云々にはここでは触れません。



「陣痛促進剤」と聞くと「こわいもの」という印象をお持ちの方もいらっしゃると思います。しかし何をかくそう、陣痛促進に最も広く用いられている薬剤こそオキシトシンです。出産の際には脳の直下にある下垂体の後葉からオキシトシンが分泌され、これが子宮筋に作用して陣痛を起こします。何らかの理由で陣痛が弱いために出産が長期化した場合に、正常な陣痛に戻すべく製剤としてのオキシトシンが投与される場合があります。

お産は競争ではありません。一応分娩所要時間の正常値は初産婦で30時間以内、経産婦で15時間以内とされていますが、30時間を越えた瞬間に突然異常になるわけでもありません。たとえ50時間経過していても、ゆっくり少しずつ進行していれば、その妊婦さんにとっては正常なお産といえます。助産師や産科医にとって、分娩の介助とは「待つ」とほとんど同義です。

ただ、子宮口が全開大して5時間経過とか、破水して3日目など、医学的に分娩を進めた方が良い場合も実際あります。このように長丁場の分娩となった場合に助産師は、骨盤が開く座位やあぐらの姿勢をとらせる、シャワーや足浴を勧める、乳頭をマッサージするなどの対策をとります。これらを行っても分娩が進行しない場合に登場するのがオキシトシンです。当院での単胎の出産12,215例のうち、オキシトシンが使用されていたのは1,559例と12.8%もありました。1,559例のうち1,396例、89.5%が経膈分娩となっており、オキシトシンによって多くの妊婦さんが帝王切開せずに済んでいます。

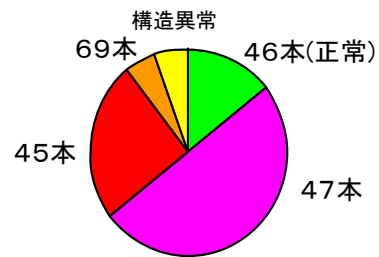
もちろんオキシトシンに限らず、全ての薬剤には副作用があり、いいことづくめという薬はありません。使用にあたっては、次の諸点が重要です。1) オキシトシンを使用する必要がある(医学的には適応といいます)、すなわち分娩が著しく長期化しており、その原因が微弱陣痛と考えられる 2) オキシトシンはポンプで精密に計量しつつ最低量より開始する 3) 使用中は胎児心拍と陣痛の状況を持続的にモニターする、これらを順守する限りオキシトシンは赤ちゃんが生まれるために必要な陣痛を正常化させ、母子を守ってくれます。

「陣痛促進剤で事故」などという新聞記事が出る場合も残念ながら稀にありますが、その陰には決して報道されないオキシトシンで助かったケースが莫大にあるという想像力をぜひ働かせていただきたいものです。犬が人を咬んでもニュースにならないが、人が犬を咬むとニュースになる、これが報道の性(さが)です。

く くせになることは少ない流産は
 《習慣流産》

流産というものは、とてもショックなもので、ご本人は大きな喪失感に苛まれるものです。ことに流産が2回、3回と繰り返した場合、このまま何も治療しなければ、次も絶対流産しそうな気がすることでしょう。しかし日本産科婦人科学会のガイドラインによれば、子宮の奇形など明らかな流産の原因がない場合、何も治療しなくても2回連続流産後の次回妊娠の80%、3回連続流産後の次回妊娠でも70%が成功することが示されています。「ね」の高齢出産の項で紹介した、当院の最高齢の50才で出産された方も、過去に5回の流産歴があるも、無治療で6回目は流産せず出産しました。

当院で2回以上続けて流産となり、その原因の検索を希望された21名について、流産で摘出された絨毛(胎盤のもとになる組織、胎児と同じ染色体をもつ)の染色体分析を行いました。結果は図の通りで、染色体が正常だったのはわずか3名(14%)でした。残る18名(84%)では染色体異常が見つかり、これが流産の原因と判明しました。この染色体異常はたまたま異常であった卵子(または精子)が受精したことによるものです。すなわち連続する流産であっても多くはたまたま運が悪かっただけであることが分かりました。



反復流産例の絨毛の染色体分析

これら21名のその次の妊娠はどうだったのでしょうか? 染色体が異常だった18名はただ運が悪かっただけです。「心配ありませんから次も自信をもっていきましょう」とだけアドバイスしました。実際、妊娠の分かった14名中12名が流産せず正常な赤ちゃんを生みました。

「ろ」の流産の項でもお話したように、女性の年齢が上がると流産率は上がり、それは卵子の染色体異常が主原因です。35歳以上の方ですと、流産(主に染色体異常で)はめずらしくなく、もし回復しても単に運が悪かった可能性が大ということになります。

逆に、若いのに流産を反復したり、上記の3名のように胎児の染色体が正常であった場合は、流産を繰り返す原因が存在する可能性があり、専門施設での検索も考慮すべきでしょう。その原因には、自己免疫異常、夫婦の染色体異常、子宮奇形、甲状腺疾患などがあります。特に自己免疫異常が重要で、抗リン脂質抗体という自己に対する抗体が胎盤で血液を凝固させ流産を起こします。これに対しては、血液の凝固を防ぐ低容量アスピリン(+ヘパリン)や抗体価を下げるステロイド剤または漢方薬(柴令湯)が投与されます。実際、上記の3名のうち2名は自己免疫が原因と判明し、治療して少なくとも1名は出産に至っています。